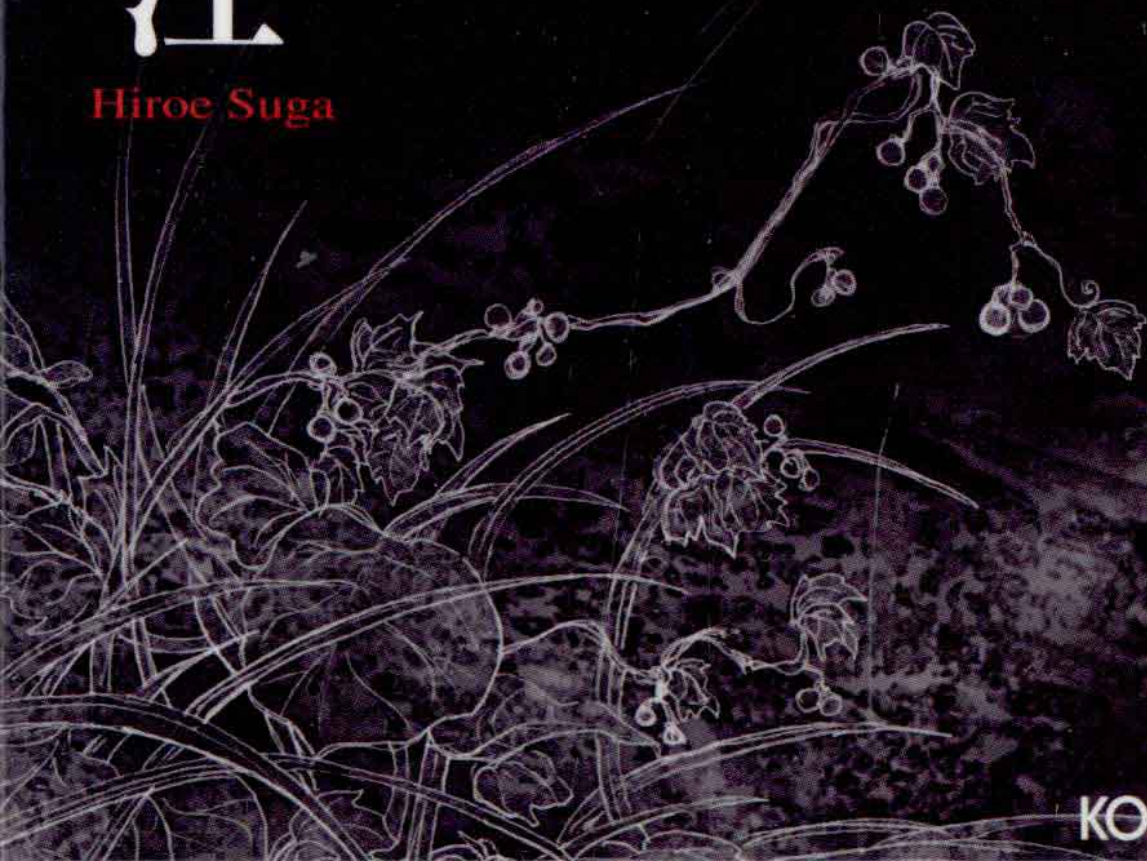


夜陰譚

YAIN TAN

菅浩江

Hiroe Suga



KOBUNSHA B



光文社文庫

幻想ホラー小説集

や いん たん
夜 陰 譚

著 者 すが ひろ え
菅 浩 江

2004年9月20日 初版1刷発行

発行者 篠 原 睦 子
印 刷 慶 昌 堂 印 刷
製 本 榎 本 製 本

発行所 株式会社 光 文 社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8114 販売部

8125 業務部

振替 00160-3-115347

© Hiroe Suga 2004

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-73747-1 Printed in Japan

[R]本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

光文社文庫

幻想ホラー小説集

や いん たん
夜陰譚

すが ひろ え
菅 浩江



光 文 社

目次

夜陰譚 やいんたん

.....

5

つぐない

.....

37

蟬螂の月 せいらう

.....

81

贈り物

.....

109

和服継承

.....

135

白い手

.....

157

桜湯道成寺 さくらゆ どうじょうじ

.....

197

雪音 ゆきおと

.....

225

美人の湯

.....

259

解説

岩井志麻子 いわいしまこ

.....

273

夜陰譚

九月の夜は弛緩^{しかん}している。

夜陰には日中の熱気が粒子の形で残存し、悪意を持つ目に見えない者によつて、夜歩く私の肌にくっつきたりとなすりつけられる。皮膚呼吸を妨げられた私は、厚い脂肪に蓄えてしまっている熱を、吐き出すことも処理することもできない。ただ、熟爛^{じゅくらん}したかのような脳を身体のでっぺんに載せ、ぶわぶわした水風船となつて彷徨^{さまよ}い続けるしかないのだ。街灯ですら、闇にきりりと切り出すはずの光の領域をぼやかせて、ゆるみきつた夜のゆるみきつたこの身体を無視している。

そう、私は肥満している。人よりもことさらに食べるわけではない。運動もそれほど嫌いではない。なのに私は肥えている。小さい頃からずっと、デブだった。

人によつてはふつくらしているだけだの多少は小太りかしらだのと表現する者もあるが、そう言う時の相手は必ず眉間^{みけん}に戸惑いと憐憫^{れんぴん}を刻んでいるのを私は見逃してはいない。喫茶店で、体脂肪率が三十パーセントを超えたらもうオンナじゃないわよね、などと笑っていた会社の同僚が、ロッカールームでは努力を尽くして私を友達扱いし、自分は慈愛溢れるスマートなオンナなのだと体中で吹聴^{ふいちやう}しているのを見るたびに、私は猛烈な自殺衝動を感じる。

三十歳を超えるこの歳になつてもまだ生き恥を晒さらしているのは、ひとえに、自分の肉体には自殺などという甘美な終末が似合わないということを知っていたからだ。

太つていても顔の造作が美しければそれ相応の生き方や死に様がある。けれども目鼻口の場所にレーズンを配した蒸しパンそっくりのご面相では、何をしてても格好がつかない。首を吊れば、私の身体は精肉所の鉤かぎにぶら下がったブタそっくりに見えるだろうし、鼻や尻から汚物を垂れ流すぶん豚肉よりも劣るに違いなかった。入水じゅすいすれば、身体はさらなる膨張を極めて蒼く崩れ、肉親さえも目を逸らすことになるだろう。薬物を呷あおれば、目玉の飛び出した煩悶の形相恐ろしく、せめて般若はんやのように品よくあればいいものの、嘔吐物に突つ伏すこの巨体なればこそ美のかけらも残したりはしないだろう。もつとも美しいとされるリストカットでさえ、力の抜けた身体がベッドの上や風呂場でどれほどの場所をふさぐかを考え、自分の厚ぼったい唇が半開きになるさまはどれほどコケティッシュと対極に位置するかを思い知るにつけ、その情景は間抜け以外のなにものでもないように思えた。

なので、私は死ぬことすらできず、自分の性格を暗くも明るくもない中庸に設定して、人様がこの容姿をあげつらつて罵倒しない程度には無難に社会生活を送ってきたつもりだった。

そうして周囲に身を添わせて息をしていると、時折、私は何者だろうかと考えてしまう。自慢できるものもなく、明日を迎える楽しみもなく、肺という名の空気袋に食物を通過させ

る柔らかな管を絡めただけの、非生産的な動物に成り下がっているような気持ちになるのだ。ナチスは収容所のユダヤ人を虐殺して脂肪から石鹼を作っていたらしいが、人に喜ばれる何かなれるのだったら私こそを石鹼にしてくれればいいのにと思ったりもするのだった。

夜歩くのは、そんな考えにとらわれそうになった時だ。

夜は、いい。

闇の中、私の身体は隠蔽される。いや、シルエットは変わらないが、顔の仔細までは判らないだろうという安心感が、私に私自身の存在を少しだけ見えなくしてくれる。

夜気がわずかに身を引き締めてくれる気持ちができるし、頭蓋に染み透る冷たさは頭脳までも明晰にしてくれる気もする。

童話だったか童謡だったかで「なんだ坂こんな坂」というフレーズがあったように思うが、私は人気ひとけのない道を選びながら、「なににくそ、ちくしょう、ばかやろう、死んでしまえ」と、もはや自分に向けてなのか誰かに向けてなのかも判別できない悪態を頭の中で繰り返し繰り返し唱えながら歩き、気を晴らすのだ。

けれども、その日の夜はつらかった。闇は冷えきらず、曇天の空は灰色を帯びていて薄明るく見える。歩いても歩いても、身が冷えるどころかじっとした汗が気持ち悪く首筋を伝うだけだったし、憂さ晴らしの呪詛じゆそは裡うちに籠こもって鈍く反響するばかりだった。

コンビニエンス・ストアの明かりを避け、大通りはずれ、曲がり角の暗いほう暗いほう

へと進み、いつそのままだこかへ行つてしまいたいと切望しながら、いつたいどれほど歩きたらう。

私はいつの間にか見知らぬ露路ろじに迷いこんでいた。車がなんとか通れるほどの細道の両側は古臭いブロック塀で、ゆくての電信柱はまるで遠近感のお手本のように続き、そこにぼつりぼつりともった街灯は豆電球、懐かしい円錐の笠をかぶっていた。柱が木でなくコンクリートなのがむしろ違和感を感じるほどだった。

暖かいものといえど豆電球の弱い光だけ、というこの無機質な情景に、私はその夜初めてのひそやかな冷氣を得ることができた。

その露路では、吸い込む間に肺が洗われる。身体に巻いた脂肪がほんの少し固くなる。

身体中の熱を安堵の息に託して吐き切った時、私は、ふと、電信柱の灰色の肌に妙な傷を見つけた。

何か鋭いもので引つかいたと思われるそれは、ちょうど私の頭の上ほどの高さに位置している。

漢数字で「十一」。

「一」の字が小さいせいか、それは無表情な人の顔にも思えた。

弱い光にぼうつと浮き上がった三本の線は、確実に私を認識していた。私に向けた諦念をこめて瞑目しているようにも、目を細めて薄ら笑いを浮かべているようにも見える。

私は夜の道に佇^{たたず}み、対峙するその顔から何らかの意味を汲み取ろうと努力した。かつては学校で、今は会社で、しょっちゅう街中で、生身の人間相手にするのと同じことをだ。けれども実際の人間とは違って、線の顔は真実という名の隙を微塵^{みじん}も表わしはしなかった。

その時、私の傍らを、体温のぬくみの影がすうっと通り過ぎた。

周囲に溶け込む暗い色のスーツは、見るからに布地がくたびれている。背を丸めた中年の男だった。

男はちらりと私に視線をくれると、そのまま顔を伏せて行ってしまう。

遠ざかる後ろ姿をぼんやり見送っているうちに、私の首は疑問の形に傾げられていった。

男は、次第に胸を張っていくのだ。一足ごとに背は次第に伸び、肩が後ろへ引かれていく。引きずるようだった足取りも、あっという間にきびきびとした早足に変わった。

男は私から五本離れた電柱の前で立ち止まると、すい、と顔を上げた。

知らないうちに私は男へ近づこうとしていた。街灯が彫り上げる男の顔には、まるで天上世界に接したかのような法悦があった。小さな街灯を、まるで天界から射し込む光のように浴びて、男はうつすらと笑っている。

「見えますか」

急にそう言われて、私は驚いた。男は電柱から視線をはずさないまま、うつとりともう一度言った。

「あなたにもこの顔が見えますか」

男の目の前の電柱にも、線彫りの顔があつた。

「ええ」

と、私はぼんやりと答える。

男は、刹那、つらそうな表情になつた。

「すみません。この露路へ来ているんですから、もちろんそうなんでしょうね。私はいつもこうして判りきつたことを質問しては、人に嫌われてきたのです。同僚にも、部下にも、自分の子供たちにすら……。でも、もう今日で終わりだ」

またとろけるような笑みを浮かべて、男はそつと電柱を撫でた。

私は訊かずにはいられない。

「終わりつて、どうしてですか」

男が目を閉じる。涼やかな夜の世界に、目蓋の閉じる音が、しん、と輪になって広がるようにも思えた。

男はゆつくりと腕を上げ、手を広げた。引き寄せられるように電柱に踏み出すと、そのまま、ひた、とコンクリートの柱に抱きつく。

私にまで、彼の肌を感じる心地よい冷気が伝わる気がして、目眩めまいがした。

男は顔を私のほうへ向け、頬を灰色の肌につけている。もっと冷気を、と私が念じるのと

同時に、男は堪えきれぬ様子で電柱に腕を回し直してしつかりと抱きしめた。

どこかから、しわしわ、しわしわ、と音がする。ソーダの泡のような、紙を丸めるような音だった。

「ああ」

私の喉から声が漏れた。

男のしよぼくれた顔に、しだいに木目が現われていくのだった。頼りなげな頬には美しい等高線が引かれ、ずんぐりした鼻は端正な^{まさめ}柎目を宿している。

「これでいいんです、これで」

男は幸せそうに呟く。唇は四角く開いていた。腹話術の人形のように。それでも彼は歌うように続けて、

「家族のためにも死ぬわけにはいかないから、私はこれでいいんです」
名残惜しそうに電柱から身を離れた。

こここつ、と彼の肘から木と木の触れ合う柔らかい音が響く。

私はその音だけで彼が充分に羨^{うらや}ましかった。自分の身体の中からこのような優しい音が溢れ出るのなら、どんなにかいいだろう。それとも私の場合は分厚い脂肪細胞にはばまれて、音すら内へ内へと籠^{こも}ってしまふのだろうか。

彼は私に正対した。ほんのりと木の香がした。男はもはや貧相な中年ではなく、穏やかな

人の輪郭を借りる歳経^{としふ}りた樹木そのものだった。まなこは真つ黒な節穴になつてしまつたが、俗っぽい比喻とは正反対の底知れぬ眼力を秘めているようだった。不健康そうだった色黒の皮膚は、すでにほんのりと白光りする木肌の色で、油で磨き上げたように滑らかだった。

私はきつと切ない目で彼を見ていたに違いない。彼はほのかに頬笑むと、緑の息でこう言つた。

「あなたは宝石かな。それともガラスですか」

「どういうことでしょう」

「あなたのような歳の女性は、みんなそういうものになりたがるようですよ。私が会つた人の中には、銀細工という人もいました」

私は気が遠くなりそうになつた。

「なれるんですか、そんなものに。あなたのように。こんなふうに。この身を捨てて、違うものに」

男は、こく、と下顎を鳴らしながら、

「なれると思いますよ。ここへ来てしまつたびに一本ずつ線を引くのです。三本引いて完成したら、その次の訪問で満願成就ですからね。ほら、これをあげましょう」

ポケットを探つた手が、私に差し出された。精緻な木の指が、くくく、と詰まる動きで開くと、そこには柄のずんぐりした小さなドライバーがあつた。

夜の中のドライバーは、愛^{いと}しいくらいに冷えている。

男は満足げに、ぼく、と口を閉じると、踵でくるりと回って背を向けた。

こつく、こつく、こつく、と彼はしだいに遠ざかる。

朴^{ぼく}訥^{とつ}な歩き方だ、と私はその背に思った。

あの姿を得た彼はきつと少し楽になるだろう、とも。

足音が絶え、世界は再びきりりとした夜気と光の円錐の領分に戻った。

私は男が抱きついていた電信柱を見上げてみる。

そこにはもう線描きの顔はなかった。

隣の電柱には、「十」とある。その隣は「一」だけで、変化^{へんげ}の力を秘めた「十一」の完成

品はそれほど多くなかった。

何をすればいいのかは、もう判っていた。

けれどももうドライバーは掌の中でぬくくなってしまうていて、私は小心者だけが感じ取る勘のようなもので、今日はまだその時機ではないと知った。

すると、急にブロック塀の端が目についた。

惜しみつつ角を曲がると、そこはもう空気がゆるんでいて、光量もみだらなほどに豊かな、いつもの不浄の街だった。

だから、真夜中の肥満体はとぼとぼと家路につくしかなかった。